
編集後記

大学改革のため、大学入試も含め教育論議が活発である。新聞にこうした記事が載らない日はない程である。大学の教育で言うと「専門知識とは何か」、「専門知識をどの程度まで記憶すれば、理解に結び付き活用できるのか」という大きな疑問がある。コンピュータが発達し、辞書や辞典を何冊も入れた電子辞書が掌に載るようになり、スマートフォンで様々な用語の検索も瞬時に可能となった。こうした時代に、大学の専門課程の教育における「記憶」の在り方はどうあるべきなのか。

その専門科目の試験の形態を考えよう。勉強して記憶した努力の量を評価するための試験がある。しかし、大学を修了して社会に出れば、電子辞書やスマートフォンを活用できるため、記憶自体はそれほど重要ではないだろう。むしろ、専門課程の試験に、電子辞書の持ち込み可として、記憶の先にある「専門的知識の理解と活用」に関わる試験を行うことが本来の姿かもしれない。しかし、そのような試験問題の作成は容易ではないだろう。

30余年前の大学院入試では、外国語が2教科課せられ、筆者は英語のほかにドイツ語を辞書なしで受けた（今では信じられないが）。その後何年か経って、ドイツ語に関しては辞書の持ち込み可となった（今では外国語試験は英語1科目だけになっている）。ドイツ語は格変化が複雑で文

法を理解していないと辞書を引くことができない。何とか和訳はできても、和文→ドイツ語訳は辞書だけでは難しい。専門科目の理解と活用もこれに類似しているかもしれない。

記憶は、脳の中で神経細胞と神経線維の組み合わせによって生理学的に実現されているだろうが、果たしてその先の「理解」「活用」となると、これは記憶の単なる寄せ集めではなく、さらに「高次のもの」がどうやって脳の中に実現されているのか、全く不明である。もちろん、「理解」「活用」のためにも、記憶もある程度は必要なことがわかる。

新聞記事には「専門知識の習得が望ましい」と頻繁に書かれるが、当該の専門用語の辞書を1冊まるごと記憶したところで、社会では全く役に立たないだろう。「単なる記憶」と「活用可能な形での理解」との間に大きな差がある。こうしたことを考えると、教育とは本当に奥が深いものだと思う。「頑張り」という精神論だけでなく、もっと科学的な教授方法の研究開発が待望される。

金井 浩

東北大学大学院工学研究科電子工学専攻
／医工学研究科医工学専攻

超音波医学

Japanese Journal of

Medical Ultrasonics

第42巻 第3号 (通巻第287号)

© The Japan Society of Ultrasonics in Medicine

—禁転載—

本体価格 2,000円+税 (本誌購読料は会費に含まれます。)

平成27年5月15日発行

編集者 一般社団法人日本超音波医学会編集委員会 委員長 金井 浩

発行者 一般社団法人日本超音波医学会 理事長 工藤 正俊

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2-23-1

お茶の水センタービル6階

TEL 03-6380-3711

FAX 03-5297-3744

印刷所 大村印刷株式会社